

序 文

「遺跡」といえば、土の中に埋もれたものと考えがちですが、広く考えれば目の前に残る人間の生活痕跡そのものが広い意味では「遺跡」と考えられるのです。「国東半島莊園村落遺跡詳細分布調査」はまさにそのような考えに基づいて、圃場整備によって失われる水田遺跡（現地表面にある畦や水路など）ばかりでなく、地表面に刻まれた地名や水利などによって決められる慣行や伝統行事など村落共同体に蓄積されたあらゆる情報を調査してまいりました。田染地区から始まった調査も早くも十一年の歳月が流れました。国東半島でも圃場整備が進み、伝統的な景觀は一変してきています。

昨年度、当資料館は開館十周年の記念事業として「中世のムラと現代」というシンポジウムを東京（於早稲田大学）と豊後高田市（於同中央公民館）で開催しました。田染地区での莊園調査が始まった昭和五十六年は、資料館の開館の年であり、この調査は資料館の歩みそのものでした。その意味でシンポジウムは、資料館十年の歩みの総括であり、今後の進むべき方向を模索するものであると同時に、改めてこの調査の重要性を強くアピールするものとなりました。

思えば多大な成果を得た田染莊の調査が終了してから七年になります。田染莊調査に引き続き、昭和六二年度から都甲地区で本調査を開始し、中間報告の概報を四冊と報告書資料編を刊行し、六年をかけて漸く本年度、調査報告書の本編を上梓する運びとなり、ここに都甲地区での調査も無事終了することになりました。

この間、調査委員の渡辺澄夫、賀川光夫、石井 進、八賀 晋、豊田寛三、後藤宗俊の諸先生方、調査員の河野 了、出田和久、海老澤 衷、乙咩政巳の諸氏には、調査委員会でのご指導やご執筆などのご協力を賜りました。また、地元の豊後高田市教育委員会や都甲地区の関係者には、調査に際しては、さまざまな便宜をお図りいただきました。調査に協力いただいた皆様に対して厚く謝意を表するとともに、本調査に対するご批正を願うものです。